

日本犯罪社会学会

第51回

大会プログラム

2024年

10月19日(土) 20日(日) 学術大会

京都大学 吉田キャンパス

〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町

日本犯罪社会学会第51回大会賛助団体御芳名

公益財団法人 日工組社会安全研究財団
龍谷大学 矯正・保護総合センター

学会運営ならびに当大会開催に関し、上記の諸団体より御支援頂きました。
ここに、その御芳名を記して感謝の意を表します（敬称略）。

日本犯罪社会学会会長 浜井 浩一
同 大会実行委員長 岡邊 健

大会日程

第1日目 10月19日(土)

9:30	受付 文学部校舎2階ホール			
10:00 12:00	自由報告A 第1講義室 (文学部校舎1階)	自由報告B 第2講義室 (文学部校舎1階)	自由報告C 第4講義室 (文学部校舎2階)	自由報告D 第6講義室 (文学部校舎2階)
昼 休 み				
13:15 16:15	テーマセッションA 第6講義室(文学部校舎2階)		テーマセッションB 第4講義室(文学部校舎2階)	
16:30 17:30	総 会 第3講義室 (文学部校舎2階)			
17:50 19:30	懇 親 会 生協吉田食堂			

第2日目 10月20日(日)

9:30	受付 文学部校舎2階ホール		
10:00 13:00	テーマセッションC 第6講義室(文学部校舎2階)	テーマセッションD 第1講義室(文学部校舎1階)	テーマセッションE 第2講義室(文学部校舎1階)
昼 休 み			
14:00 17:30	シ ン ポ ジ ウ ム 第3講義室 (文学部校舎2階)		
17:30 17:40	閉 会 式 第3講義室 (文学部校舎2階)		

会員控室 第7講義室 (文学部校舎2階)

理事会 18日(金) 17:00~18:30 キャンパスプラザ京都6階第1講義室(京都駅前) ※京都大学構内ではありません。
 編集委員会 19日(土) 12:00~13:15(昼休み) 第5講義室(文学部校舎2階)
 研究委員会 20日(日) 13:00~14:00(昼休み) 第5講義室(文学部校舎2階)
 シンポジウム打ち合わせ
 20日(日) 13:00~14:00(昼休み) 第1演習室(文学部校舎2階)

テーマセッション打ち合わせ

19日(土) 10:00~13:15(この時間帯に以下の教室を使用していただけです)
 ・セッションA 第7講義室(文学部校舎2階) ・セッションB 第7講義室(文学部校舎2階)
 20日(日) 9:00~10:00(この時間帯に以下の教室を使用していただけです)
 ・セッションC 第6講義室(文学部校舎2階) ・セッションD 第1講義室(文学部校舎1階)
 ・セッションE 第2講義室(文学部校舎1階)

司会:大谷 彬矩(信州大学)

櫻井 悟史(滋賀県立大学)

A1 刑務官文化に関する試論—コミュニティとしての「武道」の持つ機能に着目して—

○仲野 由佳理(日本大学)

受刑者処遇の主たる担い手である刑務官の業務において、「保安と処遇の両立」を達成することの重要性和困難さは、欧米を中心とした多くの研究で指摘されている。この困難な課題を達成するために注目されるのが「刑務官文化」であるが、日本の刑務所ではどのように刑務官文化を組織化してきたのか。本報告では「武道」というコミュニティの機能に着目し、元矯正職員のインタビュー調査から明らかにする。

A2 長期受刑者の「被害者の視点を取り入れた教育」の発展～加害者の中の被害体験の理解～

○東本 愛香(千葉大学) ○梅津 貴樹(千葉刑務所) 丸山 寿(千葉刑務所)

小川 孝広(千葉刑務所) 山下 公一(千葉刑務所) 平賀 涼(千葉刑務所) 後藤 弘子(千葉大学)

本刑務所の「被害者の視点を取り入れた教育」では、「本件についての理解」を、グループワークを通して進め、当時の生活や自身のリスクについて考えている。加えて自身の被害体験を語る機会も重要であると考え、モジュールを設定している。このことは自身のことを語り、他者の語りを聴き、再考し、また語る体験により「自身の責任」について考える土壌を育むのではないかと考えられる。本発表では、その実践について報告する。

A3 監獄官と各種簿冊の書式からみる明治の監獄

○兒玉 圭司(大阪成蹊大学)

明治期の監獄は、いつ、どのような展開を遂げているのだろうか。本報告は、1890～1910年頃(明治後半)の監獄に携わる官吏(監獄官)の採用・養成課程やキャリア、さらには当時用いられていた個票や統計など各種簿冊の書式に注目し、その変化から当時の監獄のありようを捉えてみたいと考える。いわば、受刑者を“見る側”に着目して監獄の展開を描こうとするものである。

A4 「行動適正化指導」の活用と実践

○岡本 融(前橋刑務所) ○東本 愛香(千葉大学)

坂井 太一(前橋刑務所) 宮園 久栄(東洋学園大学)

矯正局作成の教材「スタートアップ・プログラム」に、当所はこれまで自学自習で取り組ませてきたが、本年から同教材を活用したグループワークの試みを始めた。個々の課題を同定し、必要と思われる「力」を意識しながら進めている。特に累犯であること、高齢であることから「これまでの生活」を変容することへの抵抗や、諦めの気持ちに対しても共感的な対話を軸として向き合っている。本発表では、介入の実践について報告する。

司会:水藤 昌彦(山口県立大学)

山口 裕貴(龍谷大学)

B1 福祉領域と重なる対象者への印象に関する研究

○古川 隆司(追手門学院大学)

刑事事件の加害・被害で福祉領域と重なる対象者への印象は、多様な立場の認識枠組にもとづく影響が大きい。そこで、事例を用いたRFSEを通じた概要の把握と分析を試みる。焦点は、触法行為の結果や影響とともに社会的孤立を背景とすることの多面性がある。一方、更生保護や民間の支援組織などの協力を結びつかない要因を探索し、課題化・対処を検討するための枠組みを検討する必要がある。

B2 LGBTQ+と離脱研究

○山梨 光貴(立正大学)

離脱研究では、就労や結婚などのターニング・ポイントを一つの契機とする、社会関係資本の獲得と認知の転換からなる循環プロセスが注目されている。もっとも、従来の議論はヘテロ／シス的な視点に基づくもので、LGBTQ+の視点を十分に反映できていないとの指摘もある。本報告では、英米の先行研究を参考に、LGBTQ+に特有の経験の一つであるカミングアウトに着目して、離脱プロセスの多様性と複雑性について考察する。

B3 発達障害傾向の性犯罪既遂者における前頭葉機能と子どもへの性的認知との関連

○山脇 望美(人間環境大学)

福井 裕輝(性障害専門医療センターSOMEC)

玉村 あき子(性障害専門医療センターSOMEC)

堀切 大器(性障害専門医療センターSOMEC)

小児性愛と関連する自閉スペクトラム症が注意欠如・多動症と併存して犯罪を促進するという知見がある。本研究では、自閉スペクトラム症と注意欠如・多動症の特徴を持つ性犯罪既遂者の子どもへの性的認知が前頭葉機能と関連するのかを検討する。具体的には、子どもへの性的認知である加害行為の合理化、加害責任のわい小化、被害のわい小化と前頭葉機能である遂行機能障害と脱抑制、アパシーが関連するのかを検討する。

司会：森久 智江(立命館大学)
松川 杏寧(兵庫県立大学)

C1 自転車盗の被害リスク分析—環境犯罪学の見地から—

○大沼 貴志(科学警察研究所)
島田 貴仁(科学警察研究所)
齊藤 知範(科学警察研究所)

減少傾向であった日本の刑法犯認知件数は令和4年から増加に転じており、最多を占める自転車盗の対策が求められる中、本報告では、首都圏の1県における公営駐輪場の設備や管理体制、周辺環境の調査を実施した上で過去5年間の自転車盗の個票データを用い、駐輪場で発生する自転車盗に及ぼす影響や被害者の属性、地理的分布について報告する。その上で、自転車盗難の発生しやすい駐輪場の要素や条件を考察した。

C2 個人のライフスタイル要因や場所・状況要因が犯罪の反復被害に及ぼす影響

○齊藤 知範(科学警察研究所)
山根 由子(科学警察研究所)
大沼 貴志(科学警察研究所)
島田 貴仁(科学警察研究所)

個人が繰り返し被害に遭う反復被害について、これまで我が国ではあまり研究されていない。本報告では、複数時点で実施した調査データを用いて、各種の犯罪の反復被害に対して個人のライフスタイル要因や場所・状況要因が及ぼす影響を分析し、その結果を報告する。その上で、分析結果をふまえた防犯対策のあり方について考察する。

C3 「産学官連携」の枠組みによる『聞き書きマップ』の公立小学校への導入—「社会実装」過程のモノグラフ(3)—

○原田 豊(立正大学)

初等教育の現場に『聞き書きマップ』を導入しようとする場合、現地で持ち歩く記録用装置としてSIMフリーのAndroid端末を用いる場合が多く、従来は、この端末をいかに調達するかが大きな問題であった。本報告では、近年多くの都市で進められている「産学官連携」の枠組みによりこの問題の克服を試みた事例に基づき、その概要と意義・今後に向けた課題について論じる。

19日(土)

10:00-12:00

自由報告D

第6講義室(文学部校舎2階)

司会:正木 祐史(静岡大学)

大塚 英理子(愛知教育大学)

D1 児童自立支援施設における支援の様態—学校教員と福祉職員の関係性に着目して—

○出口 花(京都大学大学院)

多くの児童自立支援施設に公教育が導入され、福祉職員と学校教員の協働は不可欠となっているが、その態様に関する研究の蓄積は乏しい。本研究では両者へのインタビュー調査を通じてその関係性を探る。個人を注視する福祉職員と集団を意識する学校教員では児童への関わり方や行事運営の考え方等に違いが表れること、時間的・空間的な境界線を基準として役割分担がなされていること等が明らかになった。

D2 アメリカ少年司法における「トランスファー」(transfer)の展開

○今出 和利(兵庫教育大学)

「子どもと大人は異なる」ことを改めて確認した「ローパー判決」(2005年)以降下された一連のアメリカ連邦最高裁判決とほぼ時期を同じくして、イリノイ州をはじめとする諸州は、重罪に係る少年を刑事裁判所へと送る「トランスファー」、とりわけ問題とされてきた「オートマテイク・トランスファー」について、その対象を縮小させてきた。本報告では「トランスファー」の展開を概観した上で、最近の動向について整理・検討する。

D3 「パワフル(the powerful)」に対する批判的社会調査の意義と困難性

○平井 秀幸(立命館大学)

経験的データに基づく現実把握に加えて、その現実に対する明示的な批判的関与を特徴とする批判的社会調査は、主として「パワレス(the powerless)」を対象とする社会(科)学的研究として認識されてきた。本報告では、批判的犯罪学のアイデアと研究成果を参照しつつ、「パワフル(the powerful)」に対する批判的社会調査の細流の存在を確認するとともに、その意義と困難性についての考察を行う。

19日(土)

13:15-16:15

テーマセッションA

第6講義室(文学部校舎2階)

拘禁刑施行に向けて刑務所と刑務官に期待すること

コーディネーター・司会: 浜井 浩一(龍谷大学)

指定討論者: 森久 智江(立命館大学)

懲役刑が廃止され、拘禁刑が導入される。刑務所は社会復帰のための場所へと変わっていかなくてはならない。そのためには、規律と秩序が最優先され、所内のあらゆる行動が決められた手順に従って整然と実施されるような極端に構造化された刑務所内の生活環境を見直す必要がある。受刑者や刑務官の安全・安心を確保しながら、刑務所の中を社会に近づけていくためには何をどのように変えていかなくてはならないのか、受刑者にとっても刑務官にとっても生きがいを感じられる刑務所のあり方について考えたい。

1. 矯正的風土と動的保安(ダイナミック・セキュリティ)

竹中 樹(法務省矯正局)

自由刑が拘禁刑に変わることに伴い、矯正処遇を効果的に行うためには矯正的風土が重要となる。施設の安心安全は必要だが、厳しすぎる手続的保安は矯正的風土を害する。動的保安(ダイナミック・セキュリティ)は職員と被収容者の良好な人間関係を基礎とするので、矯正的風土と規律を両立させることができる。良好な人間関係はお互いへの敬意を基礎としており、被収容者を人として見る。動的保安の正しい理解を通じて刑事施設を社会での環境に近づけることを検討したい。

2. 一般財団法人「かがやきホームにおける」取組を通して

古城 いくよ(一般財団法人かがやきホーム)

刑務所出所者等の更生支援事業を行う「一般財団法人かがやきホーム」は「全ての困っている人を、家族の一員として受け入れ、一人ひとりが輝ける家」という想いを込めて命名された。ホームでの支援で重視していることは利用者と同じ目線で物事を見つめることである。「焦らず、慌てず、諦めず、腐らず」をモットーに、伴走者として寄り添いながら、利用者が自発的に決断・実行(自立)できるような環境となるよう日々取り組んでいる。

3. 大声で怒鳴るだけでは人は更生しない~受刑者たちの“声なき声”は聞こえているか~

河井 克行(元法務大臣)

大臣・副大臣と受刑者を経験した唯一無二の者として、聞くと見るとでは大違い、塀の中の実情を報告する。“受刑者脳”、人生を破壊された受刑者、過酷な生活環境、威張り過ぎる刑務官、用便往復に十八回の許可、心情把握の機会無し、精神性涵養の欠片も無し、社会復帰に役立たない職業訓練、形ばかりの矯正指導日、無為に過ごす自主学習と寝るだけの自由時間、古過ぎて少な過ぎる官本、果てしなく遠い資格取得試験、偏りまくる求人情報、遅きに失する仮釈放前講習、現場感覚無き本省と強烈ピラミッドの現場、不足する人員と欠乏する意欲、矯正と保護がバラバラ、自分の庭先しか見ない考えない検察・裁判所・刑務所、そして改革に向けたいくつかの提言。

19日(土)

13:15-16:15

テーマセッションB

第4講義室(文学部校舎2階)

警察官による市民接触行動の規定要因とインパクトに関する縦断的研究：
第一波調査の分析

コーディネーター・司会：宮澤 節生(神戸大学・龍谷大学)

この研究は、科研費基盤研究(B)(旧21H00784、現23K20649、研究代表・宮澤節生)によるものであり、職質など警察官による市民接触行動を規定する要因と、警察官による接触が対象市民のその後の認識と行動に与える影響とを解明することを目的としている。研究は同一サンプルから2回データを収集する二波の縦断的研究として実施されており、このテーマセッションでは、2023年6月に実施した第一波調査の分析結果を報告する。

1. 調査方法

岡邊 健(京都大学)

われわれの調査は、調査会社の保有モニターのうち、都市部在住の20~60代の男性を対象に行われた。第一波調査はそれ自体2段階で行われ、第1段階では過去1年に警察から職質を受けた経験等を尋ねた。終了後3日以内に行った第2段階調査では、第1段階調査で発見した被職質経験を持つ者、持たない者の一部から、より詳細な情報を収集した。有効回答は前者が77,992、後者が10,966である。本報告では調査デザインの詳細を述べる。

2. 警察官による接触の規定要因—地域属性と個人属性—

岡邊 健(京都大学)

法執行機関にとって認識可能な対象者の社会経済的属性の違いと、法執行機関が対象者と出会った地域の社会経済的特性の違いが、法執行機関の行動に作用している可能性は、日本においても仮説として成立しうる。本報告では、法執行機関の行動の規定要因を主題的に扱った、本邦過去最大規模の調査票調査のデータから、職質をはじめとする警察官による市民接触行動を規定する要因について検討する。

3. 警察官による接触が対象市民の認識に与える影響(1)—手続的公正の視点から—

佐伯 昌彦(立教大学)

手続的公正理論からは、市民と接触する際の警察の対応が公正であることが警察への正統性の知覚を高め、それゆえ法令遵守行動や警察への協力行動が促進されるとされる。本報告では、職質経験を中心に具体的な警察との接触経験に関する市民の印象についても多くの情報を得ているという本調査の利点を活かし、具体的な接触経験を基点として手続的公正効果が生じているかどうかを検証し、その結果について検討を加える。

4. 警察官による接触が対象市民の認識に与える影響(2)—威嚇効果・ラベリング・生活構造などの視点から—

松原 英世(甲南大学)

職質経験については、それを規定する要因とそれが規定するであろうその後の影響という2方向への関心をもちうる。ラベリング論に準拠していえば、前者は選択的法執行の問題であり、後者は二次的逸脱の問題である。また、後者については、日常活動理路や統制理論が示唆するような犯罪の抑止効果をもたらすかもしれない。本報告では、そうしたことから現段階でいいうることをわれわれのデータに基づいて整理してみたい。

20日(日)

10:00-13:00

テーマセッションC

第6講義室(文学部校舎2階)

性非行少年の立ち直りに向けて—社会内での取組みを中心に

コーディネーター・司会：岡田 行雄(熊本大学)

性犯罪者の再犯防止に向けた様々な施策が導入されて20年近くが経過した。これに歩みを合わせる形で、性非行少年の同種再非行を防止する取組みもなされている。しかし、性非行少年の立ち直りに向けて、少年院仮退院後などの社会内においてどのような取組みがなされるべきかについては必ずしも研究が進んでいないように見受けられる。そこで、本TSでは、性非行少年の立ち直りに向けて社会内でどのような取組みがなされるべきかを考えるために、その素材となる話題を提供してもらい、参加者と忌憚のない議論を行いたいと思う。

1. 少年鑑別所から見える性非行少年の困難

定本 ゆきこ(京都少年鑑別所)

少年鑑別所勤務の医師として出会った性非行少年の資質等の特徴を踏まえて、性非行少年が社会内で直面する様々な困難とその除去や軽減に向けて社会においてなされるべき取組みについて検討を加える。

2. 保護観察所における性非行少年処遇プログラムの実情—現場からの報告

早川 順子、角林 大地、平泉 静香、大島 由香(大阪保護観察所)

大阪保護観察所において取り組まれている性非行少年処遇プログラムの内容を紹介し、現在、当該プログラムの実施にあたって直面している課題への取組みについて検討を試みる。

3. 性障害専門医療センターにおける性非行少年への治療とその課題

玉村 あき子(性障害専門医療センターSOMEC)

性犯罪の防止のために性障害治療に取り組んでいる性障害専門医療センターSOMECにおいて、性非行少年に対して提供されている治療プログラムの概要を紹介するとともに、当該プログラムの実施にあたって直面している課題への取組みについて検討を加える。

4. 性非行少年に積み重ねられた被害への社会内での埋め合わせに向けて

岡田 行雄(熊本大学)

非行少年に虐待やいじめ等の被害体験が積み重ねられていることが性非行少年にも妥当することを前提に、性非行少年の立ち直りに向けて、性非行少年に積み重ねられてきた被害の社会内での埋め合わせがどのようになされるべきかについて検討を加える。

テーマセッションD

批判的犯罪学の広がり——領域横断的な連帯の可能性を考える

第1講義室(文学部校舎1階)

コーディネーター・司会：吉間 慎一郎(『更生支援における「協働モデル」の実現に向けた試論』著者)

司会：山本 奈生(佛光大学)

私たちは、過去の本学会大会において、批判的犯罪学の視角を定式化し、主流派犯罪学の理論と経験的研究を問い直すことで、犯罪諸科学と司法制度が依拠する枠組みに対する問題提起を行ってきた。今大会では、犯罪学内外の登壇者と議論を行うことで、批判的犯罪学とそれ以外の分野との領域横断的な連帯の可能性を考える機会としたい。

1. 葛藤パラダイムに基づく犯罪と司法の問い直し

吉間 慎一郎(『更生支援における「協働モデル」の実現に向けた試論』著者)

本報告では、R・ローティのリベラル・アイロニズム、E・ラクハウとC・ムフらの闘技民主主義を参照しながら、社会と司法の変革をいかに実現していくかを論じる。その中で、我が国において培われてきた葛藤パラダイムに基づく離脱論が主流派の犯罪観や制度観をもラディカルに変容させる力を有していたことを明らかにし、その力を最大限に引き出すことを可能にする方策を求めていく。

2. 立場や視座を動かせる／動かせない当事者の運動、政治化

要 友紀子(SWASHメンバー/APNSW運営委員)

インターセクショナルリティやポリコレが重要視されるほど、当事者運動は、アイデンティティの危機に対抗し地位向上を目指す自らの立場の固定化について見つめ直さなければならない。政治的な正しさ、コミュニティ内の加害性・犯罪性が問われるようになる一方で、当事者の中の当事者性の違い、個としての正しさ、生活や心身の安全と矛盾させない努力も求められる。当事者運動(当事者の政治化)はどのような戦略でやっていくべきか。

3. 貧困(者)の犯罪化

堅田 香緒里(法政大学)

「貧困(者)の犯罪化」は、社会福祉研究の題材であるとともに、犯罪化の可否を問う批判的犯罪学にとっても関連するテーマである。本報告は、とりわけ公的扶助の利用における貧困の犯罪化に焦点化する。そして福祉と関連する貧困の犯罪化を言説レベルで検討し、福祉政策に内在する貧困の犯罪化を制度レベルで分析する。

4. 「社会モデル」の批判的犯罪学への展開可能性に関する一考察

星加 良司(東京大学)、西倉 実季(東京理科大学)

本報告の目的は、障害学において提起された「社会モデル」と批判的犯罪学の認識枠組みの比較を通じて、犯罪現象に対して「社会モデル」の認識論を適用する可能性や妥当性について検討することである。それはまた、他者や社会に対する広義の「加害性／被害性」をめぐる問題に取り組んできた障害学と批判的犯罪学という2つの学問分野の対話の端緒を探る試みでもある。

5. 批判的犯罪学とマッド・スタディーズ

山口 毅(帝京大学)

今世紀に入って英語圏で台頭し、グローバルな広がりを持つマッド・スタディーズは、狂気を題材とする。問題の個人化の拒否、暴力の社会的水準への着眼、制度および主流派アプローチへの批判、当事者性、障害の社会モデルとの関わりなどの論点は、批判的犯罪学と少なからず共通点がありそうだ。本報告はマッド・スタディーズの主張に学びながら、批判的犯罪学との関係を検討し、領域横断的な考察の手がかりを得ることを目的とする。

6. 批判的犯罪学と「チャイルディズム」——これからの少年犯罪研究に向けて

周 筱(筑波大学)

近年、子ども研究の分野では、「チャイルディズム(Childism)」という枠組みが政治学などの領域に導入されつつある。チャイルディストたちは、子ども研究における成人中心の社会構造を批判しつつ、クィア研究、障害研究などの批判理論と同様な枠組みを子ども研究にも定式しようと試みている。本報告は、チャイルディズム研究と「犯罪」を批判的に考える批判的犯罪学との連携を通じて、これからの少年犯罪研究の新たな可能性を模索する。

20日(日)

10:00-13:00

テーマセッションE

第2講義室(文学部校舎1階)
日本犯罪社会学会のこれからを考える

コーディネーター・司会：竹中 祐二(摂南大学)

話題提供者：Martina Baradel(ECCRN/オックスフォード大学)

武内 謙治(九州大学)

上田 光明(日本大学)

前回大会において企画・実施されたテーマセッションは、偉大なる先達による、本学会50年の歩みを振り返る、貴重な場となった。プログラムで示された狙い通りに、参加者は「多くの会員によるたゆまぬ研鑽があつてこそ、いまがあるということ」への感謝に思いを強くしたことだろう。またそれゆえ、「日本犯罪社会学会の今後の50年を展望する」ことへの責任をも引き受けたのではないだろうか。

そこで今回大会では、創成期を支えたレジェンドからのメッセージに応答する企画として、テーマセッションを設けることとした。しかしそれは、学会や研究者の枷となるものであってはならない。むしろ、懸けられた期待を糧に、次の50年という未来を切り拓いていくための、新たな起点となるべきものである。そこで本企画は、若手研究者を中心に据えつつも、専門性や年代に囚われず自由に語り合うことのできる場となる、ラウンドテーブルとして実施することとした。

もっとも、受け取ったものはあまりにも多く、限られた時間でその全てに応えきることはできない。そこで本企画では、「学際性」を切り口に、話題提供をお願いすることとした。今の若手研究者は、本学会が「法学と社会学の交わる場」であることが、良くも悪くも「当たり前」の財産として享受することができており、魅力的な共同研究が積極的に展開されている。前回大会のセッションでは「国際的な研究活動」の意義についても語られたが、若手による共同研究の中にも、国際的な協働・発信が行われている例も少なくない。こうした観点から、各話題提供者からの発話をもとに、今後の本学会における研究活動を展望するべく、自由な意見交換のできる場としたい。

そこで今回は、2018年に設立された犯罪・非行を研究する若手研究者ネットワーク(Early Career Criminology Research Network of Japan: ECCRN)を代表して、Martina Baradel 会員に、当該団体における若手研究者間の共同研究等の現状や、国際的な研究活動について話題提供をいただく。当該団体には本学会会員が多く所属しており、まさに今後の本学会を担う世代からなる組織であるといえる。

また、現在まさに本学会活動を中心的に担う世代の会員として、武内謙治会員は法学研究者の立場から、上田光明会員は社会学の立場から、それぞれ本学会で構築されてきた関係性等をベースにした「学際性」のある研究活動をどのように展開されてきたのか、またそこでの利点や困難、今後の展望等についても話題提供をいただく。

かような話題提供をもとに、本学会で今後発展させていくべき「学際性」について、相互に考える契機としたい。

20日(日)

14:00-17:30

第51回大会シンポジウム

第3講義室(文学部校舎2階)

刑事司法における「対話」

コーディネーター・司会：森久 智江(立命館大学)

指定討論者：大谷 彬矩(信州大学)

Restorative Justice(修復的司法、以下RJ)は、その理念を体現するもっとも中核的な実践として「対話」を重視してきた。現状、日本においては、拘禁刑の施行を目前として施設内処遇のあり方が根本的に問われ、また、司法との連携が模索されてきた福祉や心理等の対人援助領域においても多様な「対話」実践が活性化しつつある。

本シンポジウムでは、犯罪・非行現象への対応として、刑事司法ひいては社会における「対話」が果たす役割とは何なのか、それが従来の刑事司法のあり方をどのように変えうるものなのか、刑事施設内での取り組みを主要な議論の対象としつつも、さまざまな「対話」の研究・実践に取り組むパネリストの具体的実践の様子を含めた報告をもとに、忌憚のない議論ができる場としたい。

1. 刑事司法制度の内外におけるグループによる対話の実践と理論について

坂東 希(大阪公立大学)

「対話」は、加害や被害と向き合おうとする私たちに、どのように作用するのだろうか。刑務所内の回復共同体(Therapeutic Community: TC)や社会内における性暴力の加害、被害の当事者グループの実践などから、聴くこと、話すことの困難と可能性について検討する。また、異なる経験や背景、立場を持つ人が輪(サークル)になり、できるだけ対等に聞き合い話し合う安全な場づくりに必要な要素についても考察する。

2. 刑事施設と対話

平畠 隆充(富山刑務所)

令和7年施行予定の拘禁刑を目前に、刑事施設では現在、「対話」を取り入れた矯正処遇を行う動きが進んでいる。その流れは、数年前名古屋刑務所で発生した、受刑者への不適正処遇事案を契機として、よりいっそう加速しているところである。本発表では、刑事施設における対話実践の現状と課題について紹介しつつ、「刑事施設と対話」との関わりについて考察する。

3. 「刑務所アート展」が社会にひらく対話の可能性とは何か

風間 勇助(奈良県立大学)

刑務所アート展では、絵画や書、漫画、詩、短歌、俳句、川柳、エッセイなどの文芸作品を全国の刑務所から集め、展示や対話のイベントを開催している。刑務所から届く表現に私たちはどのように向き合い、作者たちに応答することができるだろうか。これまでの作品や展示を振り返りながら、アートというコミュニケーションが生み出す対話や関係性とは何か、その可能性と課題を議論したい。

連絡事項

- ※ このたびの日本犯罪社会学会大会は、対面での開催となります。キャンパスへの入口を1カ所に限定していますので、アクセスマップをご覧ください、お間違いのないようご注意ください。
- ※ 今大会は会員・非会員を問わず、事前の参加申込を必須とします。下記の案内にそって、参加申込をお願いいたします。参加申込・参加費支払いのないまま当日会場にお越しただいても、大会にはご参加いただけません。非会員で登壇予定の方も、必ず参加申込と参加費のお支払いをお願いします。
- ※ 当日受付で必要事項を記入いただいた方に、大会校 Wi-Fi のゲストアカウントを発行します。ただし、発行数に限りがあるため、ネット環境は可能な限りご自身で整えていただきますようお願いいたします。なお、大会会場では eduroam が利用できます。
- ※ 今大会では昼食の提供は行いません。近隣の飲食店等をご利用ください。

■ 大会参加費（いずれも2日間有効）

- ・ 会員一般参加者 3,000 円
- ・ 会員院生参加者 1,000 円
- ・ 非会員一般参加者 4,000 円
- ・ 非会員院生参加者 2,000 円
- ・ 学部生参加者 無料
- ※ 懇親会費 6,000 円

■ 参加申込方法

下記のサイトにて、チケットの購入（参加費の支払い）をお願いします。チケットの購入には Peatix のアカウントが必要です。アカウントをお持ちでない方は、お手数ですが新規登録をお願い致します。販売期限は、**会員・非会員ともに、2024年10月12日 23:55**です（コンビニ・ATM 払いは締切が1日早くなります）。なお当日は、受付で氏名を伝えていただければ結構です（Peatix アプリのダウンロードやQRコードの提示は不要です）。

「日本犯罪社会学会第51回大会」参加申込・チケット販売ページ URL

<https://hansha51.peatix.com/>



- ※ なお、懇親会（大学学食での立食パーティ）への参加をご希望の方は、参加費とあわせて懇親会のチケットもお買い求めください。懇親会は会場定員の都合上、早めに販売を終了する場合があります。
- ※ 購入されたチケットは、いかなる理由があっても返金できません。
- ※ 領収書はPeatixから発行されます。大会校では行いません。領収書の発行を、参加費と懇親会費で別にする場合は、お手数ですが、購入・決済を2回に分けて行ってください（1回でまとめて購入すると、懇親会費を含めた金額での領収書しか発行されません）。大会実行委員会は適格請求書の発行登録事業者とはなっておらず、適格請求書（インボイス）の発行はできません。ご了承ください。

■ 資料のオンライン配付について

本大会では、シンポジウムを含むすべての企画において、配付資料の電子化（オンライン配付）を実施します。参加者ご自身で、研究委員会の定める Google Drive から資料をダウンロードしていただきます（Google アカウントが無くてもダウンロード可能です）。Google Drive の URL は、参加申込を行った Peatix のアカウントに登録されたメールアドレスに、10月15～17日頃に送信する予定です。また、大会当日には、会場にも QR コードを掲示します。

アクセスマップ[1]

出町柳

百万遍



百万遍



通行不可



今出川通 Imadegawa St.

アクセス
マップ[2]

京大正門前



通行不可

正門

大会会場

総合研究2号館

文系学部校舎

文学部校舎

文学部校舎
(講義棟)

文学部東館

総合博物館

文学部陳列館

尊経堂

附属図書館

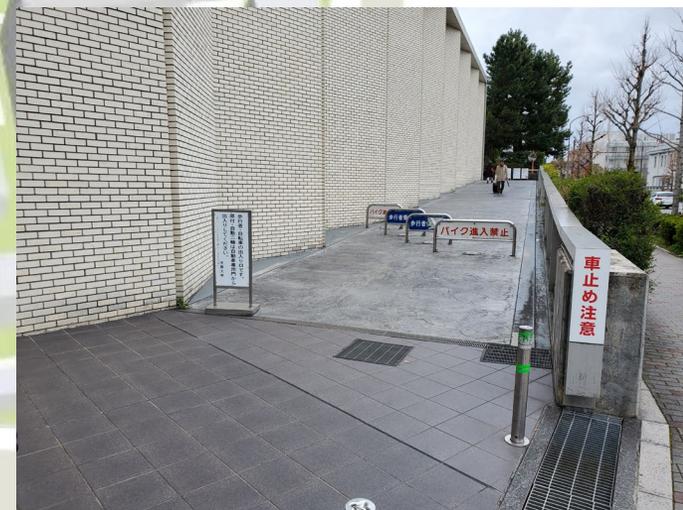
百周年時計台記念館

本部棟

教育推進・学生支援部
学生総合支援センター
健康科学センター

N

京都大学前(hoop)



入口のスロープ
(点線の赤い丸の部分)

会場までのアクセス方法

①京都駅から市バスを利用する

(1)市バス「京都駅前」から乗車 約30分

- ・ A2のりばから 7号系統「四条河原町・ 銀閣寺」ゆき
- ・ D2のりばから 206号系統「三十三間堂 清水寺 祇園・北大路バスターミナル」ゆき

(2)「京大正門前」または「百万遍」で下車→徒歩 約5分

②京都河原町駅から市バスを利用する

(1)市バス「四条河原町」から乗車 約20分

- ・ Gのりばから、3号系統「出町柳駅 百万遍 北白川仕伏町（上終町・瓜生山学園 京都芸術大学前）」ゆき
または 7号系統「出町柳駅 百万遍 銀閣寺」ゆき
- ・ Eのりばから、201号系統「祇園・百万遍」ゆき または 31号系統「高野・国際会館駅・岩倉」ゆき

(2)「京大正門前」または「百万遍」で下車→徒歩 約5分

③京都駅から地下鉄と市バスを利用する

(1)地下鉄烏丸線「国際会館」ゆきに乗車 約10分→「今出川」で下車

(2)市バス「烏丸今出川」から乗車 約10分→「百万遍」で下車→徒歩 約5分

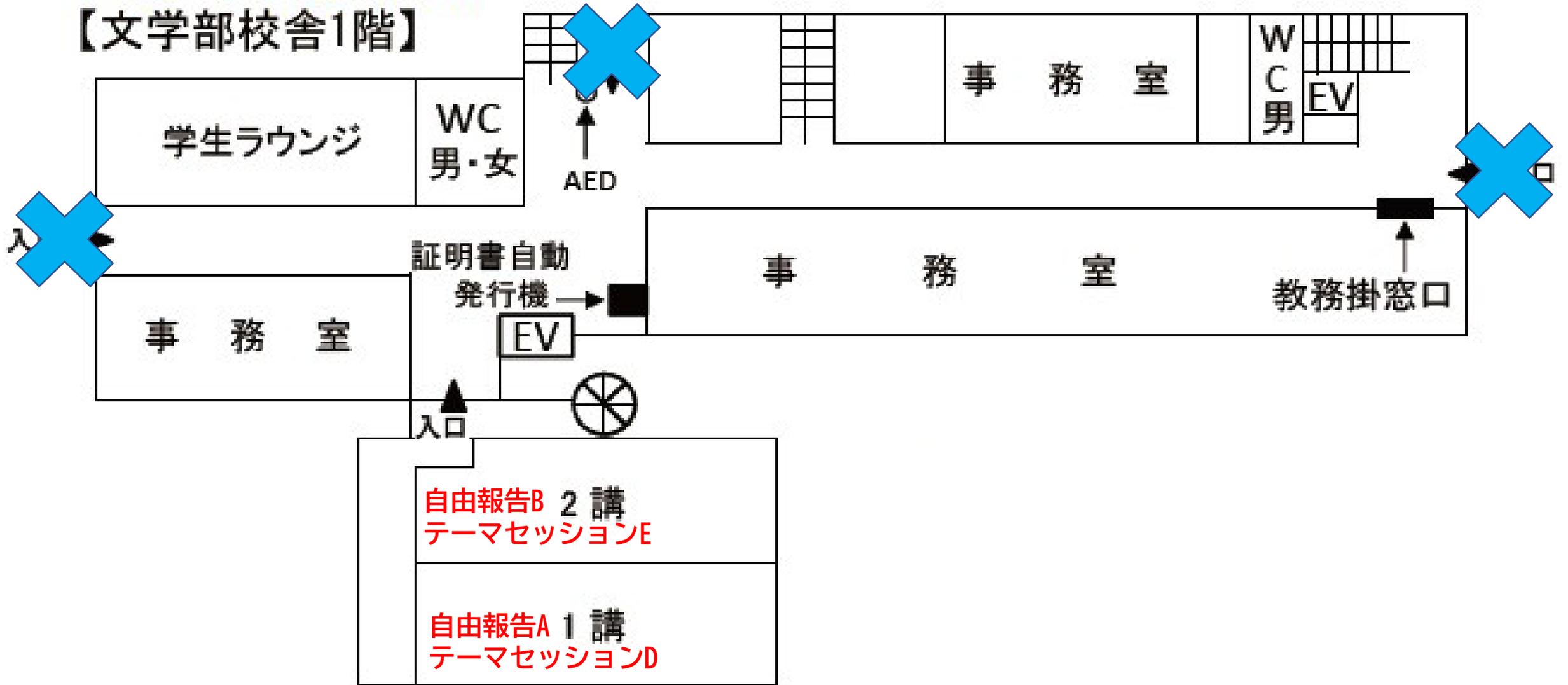
- ・ 201号系統「出町柳駅 百万遍・祇園」ゆき
- ・ 203号系統「出町柳駅 銀閣寺・錦林車庫」ゆき

④出町柳駅から徒歩（約15分）

会場案内図

1階 = First floor

【文学部校舎1階】



懇親会会場 案内図



2025年度 研究助成の募集

<助成対象分野>

少年非行防止対策、子ども・少年・女性・高齢者を対象とする犯罪等の防止対策、組織犯罪対策、薬物銃器犯罪対策、犯罪の国際化への対策、犯罪被害者支援対策、マイノリティ・マジョリティの安全安心な共生のための対策等、社会安全問題に関する社会科学の研究を主として助成の対象といたします。

助成種別	助成の対象	1件当たりの助成上限額
一般研究助成	個人、またはグループによる研究	300万円
若手研究助成	40歳以下の個人研究	100万円

募集開始が2ヶ月早くなりました！

募集期間:2024年9月1日(日)~同11月30日(土)

決定時期:2025年3月上旬

助成期間:2025年4月から2026年9月30日までの1年半

募集に関する詳細、助成件数、採択研究課題等過去の実績は、当財団ウェブサイトをご覧ください。

社安研

検索



公益財団法人 にっこうそ 日工組社会安全研究財団

東京都千代田区内神田 1-7-8 大手町佐野ビル 6階

TEL:03-3219-5177



女性犯罪研究の新たな展開

岩井宜子先生傘寿・安部哲夫先生古稀記念論文集

編集代表 後藤弘子・宮園久栄・渡邊和美・柴田 守

2023年5月刊行

【座談会】21世紀の「女性と犯罪」を考える

司会：後藤弘子

参加者：安部哲夫・岩井宜子・小西聖子
名執雅子・宮園久栄・渡邊和美

女性犯罪研究

家父長的ジェンダー差別秩序と刑事法／後藤弘子

日本の女性犯罪史(1980年代～2010年代)／伊比智=山梨光
貴=柴田守

ドイツの女性犯罪研究レビュー(1980年代～2010年代)／海老澤佑

女性による殺人

女性による殺人事例の特性の変化／柴田守

わが国における新生児殺・嬰兒殺・「親子心中」について／
田口寿子

矯正施設における処遇

矯正施設に収容された女性の処遇と社会復帰支援／名執雅子
受刑者を親にもつ子ども(拘禁者を親にもつ子ども)への刑務所の

対応／矢野恵美

少年院におけるマインドフルネスの活用の実践報告／東本愛香
ファミリー・バイオレンス

今さらながら、今だからこそ、DV防止法改正／宮園久栄
代理ミュンヒハウゼン症候群と「病气」概念／南部さおり

【解説】虐待に関係する損傷の法医学的なみかた／藤田真幸
フィンランドにおける児童虐待を予防する方策／齋藤実

性犯罪・被害

性犯罪の被害者には女性が多い／大江由香

女性性犯罪者の特徴／渡邊和美

性暴力被害の実態／山梨光貴=柴田守=宮園久栄

最近の課題と刑事政策

COVID-19と刑法／井田良

大麻に対する刑事規制の在り方／太田達也

犯罪を行った精神障害者の処遇／柑本美和

A5判 494頁 978-4-86031-184-1 定価7,700円(税込)

〒113-0033 東京都文京区本郷1-25-7 <http://www.shogaku.com>
verlag@shogaku.com TEL(03)3818-8784 FAX(03)3818-9737



犯罪被害と「回復」

求められる支援

伊藤富士江(編著)

「犯罪被害者調査」の結果から、性被害、
交通被害、身体的な被害にあった被害者
たちの声をまとめている。その貴重な語り
をもとに、被害の実態とその影響、必要な
支援策、被害後の変化、そして被害者支援
への具体的な要望などを分かりやすく解説。



定価 2,700円+税
A5判/248頁/並製
ISBN978-4-87798-859-3

刑事法をめぐる 被害に向き合おう!

被害者・加害者を超えて

阿部恭子、岡田行雄(著)

刑事法に関わる人々がどのような被害を
受けているのかについて、事例を紹介し、
事例をもとに、かかる被害が生み出され
る背景や問題点を解説し、被害への適切
な手当とは何かを検討する。



定価 3,000円+税
A5判/312頁/並製
ISBN978-4-87798-863-0

取調べの可視化 その理論と実践

刑事司法の歴史的転換点を
超えて

小坂井久(編集代表)

「ミスター可視化」小坂井久弁護士。氏の
古稀を祝うため、ともに活動してきた弁護
士や研究者たちが寄せた論集。取調べ可
視化の到達点と今後の課題を論じ尽くす。



定価 8,000円+税
A5判/552頁/並製
ISBN978-4-87798-865-4

日本の青少年の 行動と意識

国際自己申告非行調査(ISRD)
の分析結果

ISRD-JAPAN実行委員会(編)

世界各国の中学生にたいして、非行経験
にかんする自己申告調査(自記式によるア
ンケート調査)を実施し、その結果をまと
めた論文集。



定価 8,000円+税
A5判/272頁/上製
ISBN978-4-87798-853-1

現代人文社

発売：大学図書

東京都新宿区四谷2-10 ハツ橋ビル7階
TEL 03-5379-0307 FAX 03-5379-5388
<http://www.genjin.jp>

荒井 悠介著 7040円

若者たちはなぜ悪さに魅せられたのか

渋谷センター街にたむろする若者たちのエスノグラフィ
ギャル・ギャル男と呼ばれた若者たち。彼らは渋谷のストリートでなにを学び、なにをその後の人生に活かしていったのか。20年におよぶ追跡から迫る、圧巻のエスノグラフィ。

高橋香苗著 2420円

ギャルであり、ママである

自分らしさと母親らしさをめぐって
一見すると既存の母親らしさから解放されて、自由に生きているように見えるギャルママ。彼女たちは本当に自由な存在なのか。

赤羽由起夫著 7150円

少年犯罪報道と心理主義化の社会学

子どもの「心」を問題化する社会

大江 将貴著 2970円

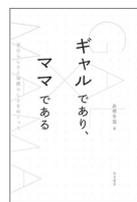
学ぶことを選んだ少年たち

非行からの離脱へたどる道のり

都島梨紗著 4070円

非行からの「立ち直り」とは何か

少年院教育と非行経験者の語りから



晃洋書房

京都市右京区西院北矢掛町七番地
TEL 075(312)0788 / FAX 075(312)7447

価格は税込
<http://www.koyoshobo.co.jp>

デジスタンス

犯罪・非行からの離脱



岡邊 健 編

四六判並製312頁／定価：2500円

薬物依存からの「回復」

ダルクにおけるフィールドワークを通じた社会学的研究



相良 翔 著

A5判上製288頁／定価：4600円

こころに傷を負うということ

阪神淡路大震災被災者と臨床家のレンズから見るトラウマ



谷家優子 著

四六判上製176頁／定価：2000円

教育の〈自由と強制〉

矯正教育におけるナラティブ実践の機能に関する教育学的研究



仲野由佳理 著

A5判上製272頁／定価：4800円

学びを愉しく

〒157-0062

東京都世田谷区南烏山 5丁目20-9
ハウス・アム・バンホフ 203

株式会社 **ちとせプレス**

Webサイト: <http://chitosepress.com>

E-mail: info@chitosepress.com

Tel: 03-4285-0214 / Fax: 03-4243-3725



ジェンダー視点で読み解く重要判例40

ジェンダー法学会 編 二宮周平・後藤弘子 編集代表

二〇二三年一月刊 定価六一六〇円

この20年間の①性差別と人権、②家族、③セクシュアリティ、④暴力・性暴力、⑤リプロダクティブ・ヘルス/ライツと生殖補助医療、⑥社会保障・税・逸失利益、⑦労働を取り上げる。経産省事件(最一小判2023年7月11日)ほか近年の最新論点を網羅。



行為依存と刑事弁護

性依存・窃盗症のための弁護活動と治療プログラム

神林美樹・斉藤章佳・菅原直美・中原潤一・林大悟・丸山泰弘 著

二〇二二年三月刊 定価三五〇〇円



刑事事件、民事事件、法律相談に必要な「窃盗症(クレプトマニア)」「性依存」についての知識と対応をまとめた書。

ジェンダー平等の実現と司法

弁護士実務から見る課題と論点

日本弁護士連合会両性の平等に関する委員会 編 二〇二三年五月刊 定価五〇六〇円

家族法、刑法(性犯罪)、DV防止法など最新の改正論点がわかる。様々な差別や人権課題、労働、社会保障などの幅広い問題を解決に導くための実践の書。



家庭の法と裁判

FAMILY COURT JOURNAL

50

二〇二四年六月刊
定価一九八〇円



50号記念特集 家庭と子どもの現状と未来

●ポスト「20世紀体制」の家族とは―「親の責務の明記から考える」

落合恵美子(京都産業大学教授・京都大学名誉教授)

●子どもの権利主体性と現代家族の多様化 榎村政行(早稲田大学名誉教授)

●子どもの権利の将来 木内道祥(弁護士・元最高裁判所判事)

●家庭裁判所から見る現代の家庭と子どもの現状と未来

村田音志(東京家庭裁判所長)

●少年法の現状と未来 廣瀬健二(早稲田大学社会安全政策研究所招聘研究員)

●現代社会における矯正教育の在り方と地域社会での更生保護

木村 敦(公益財団法人矯正協会矯正研究室長・元多摩少年院長)

今福章一(中央大学法科大学院客員教授・元法務省保護局長)

●子ども福祉の現状・在り方と法律実務家としての関与

―児童福祉法を中心として 岩佐嘉彦(弁護士)

犯罪・非行の社会学

補訂版

岡邊 健編 常識をとらえなおす視座 有斐閣ブックス
初歩から研究の最前線へ。決定版入門書。A5判 定価2860円

これからの教育社会学

相澤真一・伊佐夏美・内田 良・徳永智子 著 y-knot 四六判
さまざまな課題を社会学の知識や概念で見直す。定価2640円

新・教育の社会学

〈常識〉の問い方、見直し方

荻谷剛彦・濱名陽子・木村涼子・酒井 朗 著 有斐閣アルマ
教育にかかわる問題を網羅して解説。四六判 定価2530円

社会学の基礎

松本 康 監修/小池 靖・貞包英之 編 A5判
スタンダードな社会学教育を一冊で。定価2640円

内申書を問う

教育評価研究からみた内申書問題

田中耕治・西岡加名恵 編 四六判 定価2970円
新刊 内申書にまつわる不安や疑念、問題の所在を明らかにする。

戦後日本の社会意識論

奥村 隆編 ある社会的想像力の系譜 A5判
私たちの先人が培った社会学的理想力とは。定価3960円

モビリティーズの社会学

吉原直樹・飯笹佐代子・山岡健次郎 編 A5判
新刊 「移動」研究の知的編成を問い直す。定価3850円

挑戦するフェミニズム

上野千鶴子・江原由美子 編 A5判 予定価3080円
新刊 何と格闘し、何を獲得してきたのか。第一線の研究者が集結。



刑事法廷弁護技術 第2版

高野隆・河津博史 著

刑事弁護の第一人者らによる実践的弁護技術書、待望の改訂版。初版以降の実務の蓄積と近時の心理学的知見も盛り込み解説を大幅に拡充。 ●3850円

親による子の拐取を巡る総合的研究

深町晋也・樋口亮介・石綿はる美 編著

比較法・歴史・解釈 国境を越えた子の連れ去りが拐取罪・誘拐等にも問われる現在、世界で見られる子の奪い合い、現象と拐取罪の関係を分析する。 ●7700円

ケースから読み解く法医学 正しい死因究明のために

吉田謙一 著 異状死に、適切に対応するための行動規範、指針を示す。死因とそれに関わる諸問題を理解する途を、症例・判例から学べる「法医学書」。 ●4950円

法廷弁護における説得技術 法廷でかわだつ

ブライヤン・K・ジョンソン・マーシャ・ハンター 著
大森景一・川崎拓也・東向有紀・白井淳平 訳 ●3630円

基本刑法I 総論 第3版 ●4180円

大塚裕史・十河太朗・塩谷毅・豊田兼彦 著 各論 第3版 ●3740円

基本刑法II 2刷 ●112310円

大塚裕史 著 応用刑法I 総論 3刷 ●112310円
応用刑法II 各論 2刷 ●112310円

刑法I 総論 第2版 刑法II 各論 第2版

亀井源太郎・小池信太郎・佐藤拓磨・藪中悠・和田俊憲 著 ●2090円

感化法と親権 児童福祉法と親権に関する予備的考察

許末恵 著 青山学院大学法学叢書 第8巻 ●7480円

内観法の再定位 犯罪離脱への人為的契機となる

土ヶ内一貴 著 青山学院大学法学叢書 第9巻 ●7480円

法律時報 2024 3月号

特集 刑事司法と「アウトサイダー」
——非法曹専門職との連携のあり方を考える
●20900円(ハックナンバ)



日本評論社
https://www.nippono.co.jp/

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4 ☎03-3987-8621 ㊚03-3987-8590

ご注文は日本評論社サービスセンターへ ☎049-274-1780 ㊚049-274-1788 ※表示価格は税込価格



成文堂

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-9-38 価格は税込みです
https://www.seibundoh.co.jp 電話03(3203)9201(代)・FAX 03(3203)9206

最新刊 刑事法の理論と実務 ⑥

佐伯仁志・高橋則夫・只木 誠・松宮孝明 編

A5並製/294頁/4620円

刑法概説 第3版

松原芳博 著

A5並製/250頁/2860円

融合分野としての少年法

服部 朗 編集代表

A5上製/364頁/8800円

被害者学 研究 第33号

日本被害者学会 編

B5並製/140頁/1980円

犯罪と刑罰 第33号

刑法読書会 編

A5並製/96頁/2200円

矯正講座 第43号

龍谷大学矯正・保護課程委員会 編

A5並製/118頁/1650円

刑事政策 策 第3版

川出敏裕・金光旭 著

A5並製/588頁/3850円

更生保護学事典

日本更生保護学会 編

A5上製/316頁/3080円

刑事司法・少年司法の担い手教育

丸山泰弘 編著 グリーンブックレット15 A5並製/90頁/880円

対話の会20年の修復的司法実践

山田由紀子 著 RJ叢書13

A5上製/186頁/4400円